

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第3回 フランシス・C・ジョンソン神田外語大学名誉教授
ELIのカリキュラムは進化する



昭和61（1986）年、翌年に開学を控えた神田外語大学では、ハワイ大学から英語教育の専門家、フランシス・C・ジョンソン教授を招聘しました。オーストラリア出身で、パプアニューギニアやハワイ、香港で教鞭を執ってきたジョンソン教授は同僚のピンチヒッターとして、2年間の契約で来日しました。しかし、ジョンソン教授は、その後20年間にわたりELIのディレクターとして画期的な英語学習のプログラムを構築し、神田外語大学の大きな特徴であるSALCを創り上げることになりました。ジョンソン教授を日本に引き留め、そしてSALCのプロジェクトに駆り立てたものとは一体何だったのでしょうか？



船乗りだった祖父が、スウェーデンからオーストラリアに来たのは明治23（1890）年のことです。ジョンソン（Johnson）は、スウェーデン語でヤンソン（Jansson）です。祖父はシドニーで船を降り、オーストラリアで生きることを決めました。

私は昭和9（1934）年に生まれました。父は公務員です。シドニー市役所に勤めていました。母は専業主婦です。平均的な労働者階級の家庭に育ちました。10歳以上、歳の離れた兄と姉がいて、ずいぶん甘やかされました。彼らは、私をお人形のように可愛がってくれました。

若い頃はスポーツに熱中していました。水泳、サーフィン、陸上競技、そしてサッカー。水泳ではオーストラリア代表に選ばれました。読書も大好きで、勉強もできたので、大学に進学することができました。家族や親戚でも、大学に進学したのは私が初めてでした。政府から奨学金をいただいて、シドニー大学へ進学しました。



大学では教育学を学びました。教師になりたかったのです。なぜって？おそらく、しゃべるのが大好きだったからでしょう。大学では最初の3年間で教育学の学士号を取得し、さらに次の2年間で経済学の学士号も取得しました。優れた教師になれるかどうか自信がなかったので、経済も学んでおいたのです。大学を卒業した後、兵役を1年間務めました。空軍でパイロットのライセンスを取得しました。

兵役を終えると、パプアニューギニアで教師になりました。小学校の教員です。オーストラリアでは教えたいとは思えませんでした。だから、外国で英語を教える道を選んだのです。22歳のときでした。パプアニューギニアでは教師の育成にも携わりました。

パプアニューギニアには約750種類の言語があります。私が最初に教えたクラスには35人の生徒がいたのですが、生徒たちの話す言語を数えていくとなんと30種類にも及びました。言語の違いは文化の違い、そして世界観の違いを意味します。つまり、生徒1人ひとりの世界観が違うのです。そして英語もまた、彼らの文化とはまったく違う価値の上に成り立っています。異なる価値を持った生徒たちに英語的な思考を浸透させていく。それは非常に困難な仕事でした。何か方法を見いだす必要がありました。

そこで私は英語学習の教科書を執筆しました。この教科書はパプアニューギニア全土、そして太平洋の島々で使われました。教師の育成にも携わり、指導した教師たちは私の書いた教科書を使って、英語教育を行いました。私はパプアニューギニアで、クラスでの教え方を習得しました。しかし、学術的な背景を学んでいないことに気づいたのです。言語を教える自分の能力をもっと高めたい、そう思うようになっていきました。

私は英語を教えるプロフェッショナルになろうと決心しました。まず、ロンドン大学の大学院で、「第二外国語としての英語指導課程」を修めました。さらに、アメリカのコロンビア大学のティーチャーズ・カレッジで学びました。当時、言語教育の博士課程があったのはコロンビア大学だけでした。英語の博士課程というと言語学を学ぶのが一般的だった時代です。でも、私は言語教育そのものについて学びたかった。昭和40（1965）年に博士号を取得し、翌年の昭和41（1966）年にはふたたびパプアニューギニアに戻りました。その年、パプアニューギニア大学が設立され、私は英語学部の主任教授になったのです。

パプアニューギニアで教えることの醍醐味、それは国家にとって重要な人々を教えられることでした。当時の教え子の1人は、パプアニューギニアの首相になりました。その他にも、大臣や大使など、重責を担う職業に就いた人々がたくさんいます。残念ながら、オーストラリアでは、そんな重要な人たちに教える機会はなかったでしょう。

振り返ってみれば、パプアニューギニアでの経験は後の私のキャリアを決定づけました。この国の教科書を書いたことで、私はその後も教科書を執筆していきました。来日してからは、神田外語大学でも教科書を書きました。また、クラスに共通の言語がないというパプアニューギニアでの経験も、後に神田外語で実践することとなる「自立学習者」や「個人仕様に合わせた教授法」を構築する大きな出発点だったと思います。

パプアニューギニア大学の後、ハワイ大学で教え、さらには香港の中文大学で教えました。(1/6)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第3回 フランシス・C・ジョンソン神田外語大学名誉教授
ELIのカリキュラムは進化する



**日本で教えることなど考えたこともなかった。
2年のつもりでの滞在が、結局、20年になりました。**

昭和60（1985）年のことです。私は香港からハワイに戻り、ハワイ大学の教育学部で教授をしていました。あるとき、大学の同僚であるジャック・リチャーズ教授から相談を持ちかけられました。「ジョンソン教授、日本へ行ってみませんか？」と彼は聞くのです。

リチャーズ教授も私と同じく、外国語としての英語教育の教授でした。彼は、昭和62（1987）年に開学予定だった神田外語大学に教授として招聘されることになっていたのです。しかし、ある事情で行けなくなってしまった。すると、大学の設立に向けて準備を進めていた山本和男先生はとても動揺したそうです。きっと、大学設立に関する規則か何かで、教授職の人材が必要だったのでしょう。「これでは計画が台無しになってしまう」と慌てる山本先生に、リチャーズ教授は「代わりに適任者を探してきましょう」と言いました。それが私だったのです。

リチャーズ教授から相談を受けて、私は日本行きを引き受けました。日本には行ったこともなければ、ましてや教えることなど考えたこともありませんでした。でも、引き受けました。まあ、好奇心があったのですね。2年間の約束です。なぜなら、私はコメと魚が苦手だったのです。だから日本で長く生活するのは難しいと思ったのです。でも、2年のつもりが結局、20年になってしまいましたね。そして、今も日本に通っています。



余談ですが、来日して、千葉の若松台に住んでいたときに、近所の方が「本当の日本料理を食べに行きましょう」と食事に誘ってくれました。シラウオが食べられる店に行ったのです。ご存知でしょうか。生きている魚です。私は火を通した魚でも苦手なのに（笑）。



来日したのは、昭和61（1986）年です。神田外語大学が開学するちょうど1年前です。私の仕事は、入学試験の作成、そして英語運用能力カリキュラムの構築でした。

入学試験の作成では、ひとつ印象的な思い出があります。私は英米語学科の入学試験で、全得点の40%をリスニングに割り当てました。しかし、この試験案を見た教員の多くは、「これは普通じゃありません。東京大学だって、リスニングの割当は10%くらいですよ。うちは新設の大学だから、そんなことはやるべきじゃありません」と猛反対です。しかし、私の意見は違いました。神田外語大学は、外国語を話すことに力を入れていく。だからこそ、リスニングを学んだことのある人々、そしてリスニングの能力のある人たちを募集していくべきだと主張したのです。

その議論は、大学設置準備委員会でも行われました。会合でも、「40%では割当が大きすぎるのではないか」という意見が大半を占めていました。すると、会合に出席していた佐野隆治会長（当時は事務長）が立ち上がり、こう発言しました。

「神田外語大学は他の大学とは違う大学にしていく。だから、他とは違う入学試験も必要でしょう」

佐野会長はリスニングの比重を大きくする私の入試案を支持してくれたのです。佐野会長は、大学教育を変革していくという信念、そして、神田外語大学を個性的な大学にするという強い信念をお持ちでした。その信念が神田外語大学を前へ前へと押し進めていったのです。

会長のお母様であるミセス佐野（佐野きく枝理事長：当時）のこともよく覚えていますよ。ミセス佐野はとても素晴らしい教師でした。彼女はいつも大学の授業に関心を持ち、教室で何が起きているか知的な質問をされました。それと、当時はボーナスが現金で支給されていました。神田の学院で受け取ったのですが、我々外国人は現金で大金を持ち歩くことに慣れていません。だから、ミセス佐野からボーナスをいただいた後に、最初に目についた銀行に飛び込んだ記憶がありますね。（2/6）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第3回 フランシス・C・ジョンソン神田外語大学名誉教授
ELIのカリキュラムは進化する



神田の学生たちは、あらゆる種類の英語を理解し、使えるようにならなければならないのです。

私が来日した当時、日本の英語教育というのは、ずいぶんと貧弱でした。初代学長の小川芳男教授は、私を東京でトップレベルの大学に連れていってくれました。学生たちはLL教室で、単語と文章を繰り返していました。まるでロボットのように。小川先生は私に聞きました。「これよりも、マシなことはできますか?」と。「もちろん、簡単なことですよ」と私は小川先生に答えました。

大学が開学したとき、私は英米語学科の教授をしていました。開学から2年間の契約が終わろうとしていた頃、佐野隆治会長（当時は理事長）は私にELI（English Language Institute）を始めないかと相談してきたのです。私は、ぜひやりたいと引き受けました。私にとってはまたとないチャンスでした。私はコロンビア大学で「自立学習者」という概念を知り、ずっと研究していました。独立した機関であるELIであればその理論に基づいたカリキュラムが実践できると思ったのです。佐野会長も神田外語大学を他とは違う大学にするためにその実践を望みました。佐野会長は、「ぜひ、もっと日本にいてください。あなたとは同い歳です。私が生きているうちは、あなたには引退させませんよ」と言ってくれました。平成元（1989）年、ELIのプロジェクトがスタートし、私は神田外語大学に残りました。



ELIでは、まず教員を集めることから始めました。ぜひ、若くて優秀な教員を世界中から探してきたかった。候補者の条件は、大学で応用言語学の修士号を取得したばかりの人々です。彼らのなかには23歳ぐらいの人もいます。一方、大学には22歳ぐらいの学生もいる。そう、ほとんど年齢の差がないのです。同年代の教員とはアートや音楽、社会情勢の話ができます。私は残念ながら、ロックスターの名前も知りませんし、あまり興味もないですから。若い先生を集めて、同世代学生たちに引き合わせて、コミュニケーションを生みだすことが狙いだったのです。まあ、私がやるよりはずっとよいでしょうから。



修士課程を終えたばかりの人々は、プロフェッショナルとしてのキャリアをスタートしたいので、日本で教えることには関心が高い。毎年、世界中に行きましたね。ニューヨーク、ロンドン、南アフリカ、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド。現地で広告を出稿し、採用したいと思った優秀な候補者には必ず、直接会いに行きました。その候補者に神田外語大学の学生たちを一生懸命教えようとする意思があるかを確認したかったからです。

ELIの教員を探すために世界中を回ったのには理由がありました。日本の学校や大学では、「アメリカ人の英語の先生を採用したい」と言われます。しかし、神田外語大学の学生はアメリカ英語が分かるだけではダメなのです。あらゆる英語を理解できるようならなければならない。イギリス英語、オーストラリア英語、カナダ英語、シンガポール英語、そしてもっともっと多くの異なる英語をです。ジョークで、「必ずスコットランド人を雇って、スコットランド英語がどれだけ難しいか、学生たちに示そう」とELIのスタッフと話しました。スコットランド英語は、私たちネイティブにとってさえ、理解するのが難しいのです。たくさんの違う種類の英語を理解できる環境を創りだしていくこと、それがELIの役割であると私は考えました。

ELIの教員には、少々変わった契約があります。彼らはELIで学生たちに英語を教えることに加えて、研究が義務づけられています。研究のテーマとは、ELIの英語運用能力カリキュラムの開発です。国籍も、文化的な背景も違う、さまざまな英語のバックグラウンドを持ったネイティブの教員たちが共通のカリキュラムづくりに取り組む。だからこそ、ELIは進化し続けるのです。その進化に決して終わりはありません。

佐野隆治会長は、ELI教員たちの研究を惜しみなく支援してくれました。例えば、JALT（全国語学教育学会）のような学会に行ってみてください。神田外語大学の教員による発表はこの大学よりも多いですよ。その理由？教員の多くが研究をしているからです。佐野会長が研究と発表を支援してくれるので、教員たちは海外の学会で研究成果を発表できるのです。教員たちが海外の学会でプレゼンテーションすれば、それは神田外語大学の名前を世界に宣伝することになるのです。佐野会長は、教員の研究を支援することが大学の教育の質を高めるものだと考えたのです。

世界的な評価が高まるについて、数多くの重要な大学が修士を終えた人々を神田外語大学へ派遣してくれるようになりました。ELIを始めた平成元（1989）年当時、ネイティブの教員は4人だけです。私が知り合いに声をかけて来てもらったぐらいでした。それが、現在では65名に上ります。毎年、教員の求人には200名から300名の応募が世界中から来るようになりました。

私はよく、佐野会長にELIの費用のことで相談に行きました。彼のオフィスを訪ねるときは、いつもお金の話ばかりなので申し訳なく思っていました。でも、佐野会長は、「ジョンソン、あなたはこのお金を自分のために要求しているわけじゃない。学生のために求めているのだから、気にしないでいいじゃないか」と言ってくれました。（3/6）

第3回 フランシス・C・ジョンソン 神田外語大学名誉教授
ELIのカリキュラムは進化する

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**大学時代は教師のもとで学べる最後のチャンス。
学びに責任を持てるようにする。それが教員の使命。**

神田外語大学のELIでは、「神田アプローチ」とも言うべき、とてもユニークな学習理論を開発しました。そのアプローチは4つの「i」から成り立っています。語学学習における、「independence」（自立）、「interdependence」（相互依存）、「interaction」（相互作用）、「individualization」（個人仕様化）です。

まず、学生たちが学習プログラムを自分で計画できるようにします。これが「自立」です。次に、学生たちは互いに協力しながら、英語を上達させていきます。「相互依存」ですね。次は「相互作用」。学生たちは相互作用をしなければなりません。そして4つ目は「個人仕様化」です。ELIのカリキュラムは習熟度合いの違う1人ひとりに向けて設計されているのです。SALCは神田アプローチのこの部分を実現しています。こういった神田アプローチによって、クラスでは膨大な量のコミュニケーションが行われます。学生たちは、学習において非常にアクティブになるのです。

この4つのiから成る神田アプローチによって、学生たちは自分の学習に責任を持てるようになっていくのです。大学は学生が教師のもとで学ぶ最後のチャンスです。私たち教員は、使命として、学生に学び方を教えなければならない。つまり、学生は「自立学習者」になるのです。



自立学習者という考え方について、私は日本に来るずっと以前から本や論文をたくさん書いてきました。最初に本を出版したのは昭和45（1970）年のことです。しかし、この考えを実践する機会はまったくありませんでした。それはなぜか？教室のなかで、30人の生徒に対して1人の教員が教えること、それが一般的な教育だからです。香港では、「ジョンソン先生、あなたには高い給料を払っているのだから、答えを教えてくださいがいいんです」とさえ言われました。自立学習者という考え方をベースにした神田アプローチはまったく違います。学生自らに行動させ、クラスメイトや教員と話させることによって学んでいく学習法なのです。



このアプローチを日本人の先生方に説明すると、「日本の学生は、とても真面目で、行儀はよいですが、行動もしなければ、話もしませんよ」と言われました。では、成果はどうでしょう。どうぞ神田外語大学のELIのクラスに来てください。学生たちがみんな活発に話しているのをご覧になれますよ。時には、どうすれば静かにできるのか、悩んでしまうくらいにね。そう、彼らはコミニカティブな状態になっているのです。

神田アプローチにおいては、教員の仕事は教えることではありません。学生が自分で答えにたどり着けるように学ぶことを手伝うことです。教員はクラスのボスではありません。学習を手助けする友達なのです。教員は学習にはさまざまな方法があることを示してくれる友達です。世界中からELIに集まってきた教員たちは、修士号を取得したばかりなので教師としての経験は浅い。でもだからこそ、新しい方法を体験することに熱心でした。かつてない教育法を実践することをいとわない教員たちがたくさんいたこと、それは神田外語のELIにとってとても幸運なことでした。

ただ、この新しい方法を実践するうえで、日本人の同僚の教員たちを説得するのは非常に困難でした。日本では、英語は文章で学ぶものだと考えています。しかし、私の考え、そして神田アプローチは違う。私は80年代の終わりから90年代の初めにかけて、神田外語学院のカリキュラムの改訂に携わったことがあります。学院にはとても強い教職員組合があり、新しい教育法の導入に反発がありました。「私たちの教え方に何か問題がありますか？」と日本人の先生方は反論します。自分たちは批判されている、と思われたのでしょうか。まったくの見当違いです。ただ、日本に限ったことでなく、世界中のどこでも教師というのは保守的なものです。（4/6）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第3回 フランシス・C・ジョンソン 神田外語大学名誉教授
ELIのカリキュラムは進化する



**学生たちが教室とSALCの間を行き来する。
それこそが神田外大における英語学習のかたちです。**

佐野隆治会長は、ELIが開発した神田アプローチを支援してくれました。この方法論が、神田外語大学を他の大学とは違うものにする重要なものであると感じられたのでしょう。学生は、神田外語が他の大学とは違うからこそ来たのであり、だからこそ私たちは魅力的でなければならない、というのが彼の持論でした。何か新しいもの、佐野会長はそれを好みましたね。

佐野会長は経営者として、大学の経営を安定させるために数多くの学生が入学することを望んでいました。一方、私は教育者として、たくさんの学生が入学し、自分たちの開発したアプローチで成果を上げることを目指していました。それゆえ、私はELIに情熱を注ぎ、佐野会長はELIを支援してくれました。そう、私と佐野会長は、理由は異なりますが、学生を数多く集めたいという目標を共有していたのです。

ELIの語学教育は年を追うごとに発展していきました。4号館にあった2つの教室の壁を取り払って、ひとつの大きな教室にして、そこに自立学習センターを作りました。これが現在のSALC（セルフ アクセス ラーニング センター）に発展していくのです。



平成15（2003）年には、新しい建物であるSACLA（自立型学習支援施設）が完成しました。学生たちはSALCで学ぶ機会が増え、教室とSALCの間につながりが生まれました。学生たちが教室とSALCを行き来しながら学ぶ。それこそが、神田外語大学における英語学習のかたちです。4つの壁に囲まれた教室という空間だけが学びの場ではありません。教室はもっともっと広い学びの場の一部にしか過ぎないのです。



現在では、崇城大学（熊本）や広島文教女子大学といった他大学にもSALCの方法論がソリューションとして提供されています。崇城大学は工学や薬学が中心であり、学生たちは神田外語の学生ほど英語を学ぶことには熱心ではありません。しかし、コミュニケーションを中心に置く神田アプローチによって、崇城大学の学生たちは英語を学ぶことに熱中し、彼らの語学能力は上達しているのです。

SALCがスタートしたときから、ある議論があります。それはSALCでの学習を必修科目にするかどうかという議論です。SALCは神田外語大学の中心的なプラットフォームとして、重要性が高まっています。では、SALCへ行くかどうかの判断は学生に任せるべきなのでしょうか？学生の好き嫌いに任せずに必修科目にすべきだという意見もあります。しかし一方で、あくまで学生の自主性を尊重して、教員はSALCへ行くように促すだけにしたほうがよいという意見もあります。これはジレンマです。私にもどうすればよいか分かりません。

神田外語大学はもっともっと柔軟性を高められると私は思います。神田アプローチのゴールは、英語学習が学生1人ひとりに合わせた仕様となることです。私たちはまだ、クラスという概念に縛られています。1クラス30人の学生は、決められた時間に、決められた場所に集まり、学ばなければなりません。その必要はあるのでしょうか？入学試験もいつでも受けられるようにすべきです。受験する準備が整ったらSALCで入学試験を受けて、合格したら翌週から通い始めればよいのです。教育のシステム、そしてカリキュラムは、そういった柔軟性を持つべきです。まだ考える余地はあるのです。

ただ、私たちには文部科学省の規則という制約があります。文科省は30人の学生を1人の教員が教える場合にのみ、補助金を交付します。補助金をもらうには、現在のかたちのクラスにするしかないのです。ですから、英語教育の柔軟性を高めるには、文部科学省も変わる必要がある。それが大きな課題です。（5/6）

第3回 フランシス・C・ジョンソン 神田外語大学名誉教授
ELIのカリキュラムは進化する

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**ELIではカリキュラムの開発が続いています。
神田外語大学の挑戦に終わりはないのです。**

私は、佐野学園で働いていることに誇りを感じています。佐野学園は私たちが教師としての質を高める機会を提供してくれています。教員には研究予算があり、自分を向上する機会として予算を活用できます。ぜひ、研究の機会を最大限に生かして、自分自身を向上させてください。

私は、教育の中心が、「教えること」から「学ぶこと」に変わるべきだと信じています。教育の主役は学ぶ者です。よい教え方とは、学生がどれだけ自分で学べるようになったかで計るべきです。ですから、教員には学びの主役が誰であるかを考えてほしい。それができれば、私たち神田外語の教員は、きっと大きな貢献ができるはずです。

そして学生たちには、神田外語大学で学び方を学ぶ機会をぜひつかんでほしい。大学時代は、英語の学び方を学ぶ最後のチャンスです。その答えはSALCにあります。SALCはあらゆる教材を備え、英語を使う機会に満ちあふれています。SALCは、あなたが自立して学べるようになることを支援する場所です。教師がいなくても、英語を上達できるようになれるはずです。



昭和61(1986)年、私はリチャーズ教授の代わりに神田外語大学に来ました。彼のほうが私よりもずっと優秀だったかもしれませんが、私にとっては、この大学に来たことはとてもよかった。それまで自分が説いてきたことを初めて実践できたのですから。だからこそ、2年間のはずの滞在予定が20年間になったのです。実践の機会を与えていただいたことには、言葉がないくらい感謝しています。ですから、ELIが神田外語大学を他の大学とは違うものとするに役立っているとしたら、それはとても嬉しいことです。最近、多くの大学でELIが設立されています。私たちはこの現象を誇らしく思います。おそらく佐野会長も同じ想いでしょう。神田外語大学には、ずっと昔からELIがあるのですから。



ただ、挑戦は今も続いています。神田外語大学のELIでは常に研究が行われ、カリキュラムは変化し、改善されています。神田外語大学の挑戦に終わりはないのです。(6/6)

フランシス・ジョンソン(Francis C. Johnson)

昭和9(1934)年、オーストラリアのシドニーに生まれる。シドニー大学で教育学と経済学を学んだ後、パプアニューギニアで教師となる。ロンドン大学で修士課程を修了した後、コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジで博士課程を修了。パプアニューギニア大学、ハワイ大学、香港・中文大学の教授を経て、昭和61(1986)年に来日。開学当時から神田外語大学英米語学科の教授として、また平成元(1989)年からはELIのディレクターとして自立学習システムSALCを確立する。平成6(2006)年より名誉教授。引退の後も、オーストラリアに在住しながら、年に3度は来日し、コンサルタントとしてELIの活動を支援してきた。平成25年(2013年)12月永眠(享年79歳)